



= 2018 ESTRO school

2018 ESTRO School 開催報告

教育委員会委員長 内田伸恵

2018年5月11日(金)～13日(日)に大阪の千里ライフ・サイエンスセンターで、ESTROとJASTRO共催の2018 ESTRO School, Multidisciplinary management of head and neck cancerを開催しました。2015年にESTROとJASTROの間で締結されたMemorandum of Understandingにより、正式な共催事業として2年に1度日本で開催しています。前回の乳癌に続いて、今回は頭頸部癌の集学的治療をテーマとしました。

ESTRO、KOSROなど海外からの22名を含め、合計128名と2016年よりも多くの方にご参加いただきました。3日間びっしりの時間割、英語での講義でしたが、参加者の皆さんも疲れを見せず、最後まで熱心に聴講してくださりました。本コースの特徴は、放射線腫瘍医のみならず、腫瘍内科医、頭頸部外科医、放射線診断医など豪華な講師陣が、まさにmultidisciplinary managementの講義を繰り広げるところだと思います。症例に基づいた参加型の講義tumor boardでは、会場からの積極的な発言も多くあり、日本で開催される通常の国際学会とは異なった雰囲気でした。日本での日常臨床との違いの発見もあり、ディスカッションも大いに盛り上がりました。また大学に席を置く者の端くれとして、講師陣の教育にかける熱意と姿勢に心打たれ、学ぶところが多かったです。教育委員会が実施する各種セミナー、教育講演

の今後の方向性や課題についても再認識する機会となりました。

今回2018 ESTRO School開催報告として、国内エキスパートと放射線専攻医の2名の先生にご寄稿いただきました。また、local organiserとして運営に尽力された石倉 聡先生にアンケート結果解析と総括をお願いしました。石倉先生のアンケート結果にもありますように、参加者の皆様の満足度は非常に高いものでした。教育委員会は、貴重な学びの機会であるESTRO Schoolを今後も継続できるように調整してまいります。次に日本で開催する2020年は、会員アンケートで希望の多かった肺癌あるいは婦人科癌のテーマで検討中です。今後も多数の皆様のご参加をお待ちしています。



= 2018 ESTRO school

ESTRO School 2018 印象記

兵庫県立がんセンター放射線治療科 太田陽介

ESTRO/JASTRO共催の2018 ESTRO School, Multidisciplinary management of head and neck oncologyが5月11日(金)～13日(日)に大阪の千里ライフ・サイエンスセンターで開催されました。共催第2回目の今回は頭頸部がんの集学的治療がテーマです。頭頸部がんは放射線治療が臓器機能温存療法の主役として、最もその力を発揮する領域であり、「患者さんのQuality of Life (QOL)を保ちつつ頭頸部がんをどう治すか？」に日々頭を悩ませている私にとっては大変待ちに待った教育コースでありました。

頭頸部がん治療に参画する醍醐味として、手術、放射線治療、化学療法の集学的治療を、頭頸部外

科や腫瘍内科の先生方といかに協調して最良の治療を個々の患者さんへ提供していくか、という難しさがありますが、同時に看護師や言語聴覚士を含む多職種チームを率いる立場として、治療後のQOLや社会復帰まで含めてマネジメントしていくという、病院の総合力を試される領域でもあると感じています。本教育コースの特徴として、EHNS (European Head and neck Society)、ESMO (European Society for Medical Oncology)、ESTROの著名講師陣の講演が聴けるというだけでなく、外科医、腫瘍内科医、放射線腫瘍医が各分野の強みをどのようにMultidisciplinary managementへと組み立てていくかが垣間見られるところかと思えます。日々の臨床

の礎となっているエビデンスの著者として名前を目にする一流の先生方の思考に触れられる機会はそうはないと思います。そのような観点から、本当に参加してよかった、これ以上の勉強になる場はない、と感じられる3日間でありました。

初日冒頭のIntroductionで、コースディレクターのVincent Grégoire先生から「とにかく遠慮せずに何でも質問するように」と優しく丁寧な説明が繰り返されました。名前を知らない放射線腫瘍医はいないGrégoire先生ですが、温厚な人柄がにじみ出る語り方に、皆がどんどん引き込まれる空気を感じました。冒頭のこの優しい語りかけがこの教育コースの象徴であったと感じます。最良の治療を参加者も含めてみんなで一緒に考えていこう、という一貫した姿勢がありました。

講義は頭頸部がんの疫学、診断学に始まり、放射線治療、手術、化学療法それぞれの総論のあと、口腔がん、中咽頭がん、下咽頭・喉頭がんと上咽頭がんの各論と、Tumor boardとしてそれぞれ2例程度の症例検討が行われました。加えて導入化学療法戦略、支持療法、頸部郭清術、耳下腺がんと副鼻腔がん、局所再発の治療、再発遠隔転移例の全身化学療法、輪郭形成ワークショップ、といった幅広いトピックスの講義が展開されました。大変充実した内容で、放射線腫瘍医としてのみならず頭頸部がん多職種チームの一員として知っておくべきことが全て網羅されていました。疫学の講義ではつい前の週に担当症例で学んだばかりの”Human papillomavirus-related carcinoma with adenoid cystic-like features”といった欧米の最新の研究成果についても触れられており、自分の中で明日からの臨床マネジメントが一段階レベルアップしたように感じられました。その中でも私が思う本コースのハイライトはTumor boardと輪郭形成ワークショップでありました。

Tumor boardは圧巻でありました。簡単な現病歴とキー画像の紹介ののち、”What do you do next?”として必要な追加検査やその結果による最終診断、その後に治療選択へとコース参加者と講師陣で議論が展開されます。ファシリテーターのGrégoire先生はできるだけ多くの参加者から意見を募るべく会場内をマイク片手に走り回り、必要な場面ではエキスパートの講師陣から意見を聞いて最良の治療法まで導いて下さいました。画像検査においては真に必要な検査のみ行うような欧州における考え方や、画像診断においては診断医の見立てが大きく尊重されるような国内との相違が興味深く感じられました。会場にはアジア・オセアニアなど海外からの参加者も多く、日本とは違う臨床判断につながる意見も出されておもしろかったです。放射線腫瘍医としてもう一人、Danish Head and Neck Cancer Group(DAHANCA)のメンバーでもあるCai Grau先生もファシリテーターをされていましたが、両先生がどちらかと言えばおとなしい参加者からの意見を粘り強く引き出していき姿を拝見し、我々は何と幸せな時間を過ごしているのかと感じるとともに、欧州からわざわざ東アジアまで来られ、このような素晴らしい教育コースを開催される講師陣の熱意

に心打たれました。

輪郭形成ワークショップは最終日の待ちに待ったお楽しみでした。Grégoire先生の頭頸部CTVアトラスは世界で最も頻用されている輪郭形成アトラスと思いますが、私もこれなくしては仕事が成立しないほど大きく依存しています。今回は2014年の領域リンパ節のアップデート、2015年のOARアトラスに続いて本年新たに発表された原発巣CTVガイドラインを含めたワークショップとなり、頭頸部輪郭形成の全行程を網羅した議論が展開されました。事前の宿題として参加者から提出された輪郭形成と比較して、Grégoire先生ご自身の輪郭もきちんと提示され、それを見た参加者からの細かなツッコミも見ものでありました。咽頭後領域や鎖骨上領域の囲み方、レベル2の前側をどこまで囲むかなど、参加者でばらつくポイントはありましたが、Grégoire先生は決して押し付けるのではなく、各臨床試験グループを集めたコンセンサスがこうでした、というスタンスでの話し方をされていました。会場から領域リンパ節への予防照射線量に関して質問があり、Simultaneous-integrated boost (SIB) IMRTにおける最適な処方線量の議論となりましたが、両先生ともに54Gyあるいは56Gyを用いているとのことで、特に変更の必要を感じていないということでありました。私も予防照射線量の低減は可能ではないかというクリニカルクエストをもっており、エキスパートの先生方がその点にはあまり疑問をもっておられないような反応であったことが興味深かったです。

今、3日間のコースを振り返って思うことは、全講義のスライドが配布されたことも含め、非常に完成度の高い教育コースであったということはもちろんですが、何より講師陣の熱い情熱に触れられたことがとても貴重な経験でありました。ESTRO Schoolのホームページを見ますと、多くの教育コースが欧州内外で展開されており、2018年の欧州内では29コース、欧州外では7コースが開催されるとのことです。内容も肺がんや婦人科がんといった領域別のみならず、粒子線、Evidence-based RT、小線源、SBRT、輪郭形成、コミュニケーション、リスク管理など、多岐にわたります。今回のコースはESTROとEHNS、ESMOのコラボレーションで成立しており、このようなMultidisciplinaryな繋がりから実現される教育コースが各領域で展開されているとすれば、大変貴重な機会だなと強く感じました。幸いにもGrégoire先生やGrau先生、頭頸部外科コースディレクターのRené



Leemans先生と話す機会を得ましたが、1年に1回ずつ欧州内と欧州外で頭頸部コースを開催していること、講師陣はとても楽しみに各地を回っていることをうかがいました。ディレクター以外の講師はアンケート結果により常時入れ替えて質を上げているとのことであり、厳しく選抜された講師陣でこそ、この充実した内容が成立しているとわかりました。「我々のボスである、Grégoire先生がいるからこそ皆楽しんで世界を回っているよ!」と先生方が話されていたのがとても納

得いきました。Grégoire先生には頭頸部CTVアトラスが日本においても日々の臨床の礎となっていること、またその教育への熱意に直接感謝を申し上げました。私にとっても大変貴重な時間となりました。

以上、参加報告とさせていただきます。このような機会を与えてくださいました教育委員の先生方、委員長の内田伸恵先生、オーガナイザーの石倉聡先生に大変感謝申し上げます。ありがとうございました。



= 2018 ESTRO school

ESTRO School 参加報告

大阪大学 放射線治療科 中西絵里奈

大阪大学で放射線治療医として後期研修を開始したばかりのある日、廊下ですれ違った指導医の先生に、ESTRO Schoolというとても勉強になる講習会があるので参加してはどうですか、と紹介していただきました。その少し前から頭頸部画像に興味を持ち始めた頃だったこともあり、迷わず、ESTRO School 2018 Multidisciplinary Teaching Course on Head and Neck Oncology (平成30年5月11日～13日、於千里ライフサイエンスセンター)に参加しました。

事前に前年度の英語スライドが資料として参加者に配布されていましたが、膨大な枚数があるため全てに目を通すことは出来ないまま、3日間、朝8時30分～午後6時頃まで英語での講義というハードなコースが始まりました。頭頸部癌の疫学、画像解剖、頭頸部手術の適応・考え方、化学療法と合併症・そのマネジメントなどについて、画像診断、頭頸部外科、腫瘍内科など各分野の専門家から講義をして頂きました。私は、耳鼻科・腫瘍内科での臨床研修経験がなかったため、系統だった講義はとても分かりやすかったです。

講習会では、お昼ご飯のランチョンセミナーの他、適宜休憩時間が設けられています。多くの受講者は、会場を出たところで供されるコーヒーや紅茶を片手に、焼き菓子などを食べつつ、一緒に受講しに来た仕事仲間や、他施設の知り合いの方と談笑するなどリラックスしていました。講師の先生方も同じように休憩されていたので、講義で分からなかった所を聞いてみようと思い、近づいて「少し質問したいことがあるのですが」と話しかけると、笑顔で「もちろん。なんででしょうか?」と応じて頂きました。ひとしきり説明して頂いた後、講師の先生は最後にまたにっこりとしてこう仰いました。「受講生の方が疑問点を話しかけてくれた方がうれしいです。そうでなければ、僕ら講師陣は休憩時間もただコーヒーを飲んで過ごすだけなのでから」と。私のたどたどしく、時に単語を探しながらの英語での質問にもじっと耳を傾けて頂けたため、疑問

点を思い切って聞いて良かったと思いました。今後参加される皆さんも、ぜひ遠慮しないで休憩時間に質問されることをお勧めします。

1日目の最後はキャンサーボードというタイトルの講義がありました。具体的な症例を通して議論することで、1日目の講義内容をより臨床に即した形で理解するというものでしょうか。前年度は、参加者がモバイル端末で治療方針選択に投票して講義を進める voting system という形式だったようですが、今回は、講師の先生方が、参加者から直接意見を聞きたいということで、当日になって方針が変更になったようです。「症例として取り上げた患者さんに対して、次にどのようなことを問診しますか?」「追加する検査はありますか?」「このステージの患者さんに対する治療方針の選択肢はどのようなものがありますか?そのうち、どれが良いと思いますか?理由も教えてください。」といった質問が講師陣から投げかけられます。皆の前で挙手して、かつ、英語で発言するのはなんとなくハードルが高く感じましたが、講師の先生方もそのあたりはよく理解されており、英語での表現が分からなければ近くの人に聞けばよいのですよと参加者に呼びかけておられました。このように、常にWelcomeな雰囲気を作って頂いたせいか、英語で発言する参加者も徐々に増えました。私も分かる範囲で質問への意見を言うようにしました。1日目の講義の終了後に開催された懇親会では、他大学の方々と交流できました。他大学の若手の先生とお話した際には、私の所属する大阪大学の研修プログラムとまた異なる研修の様子などを聞くことが出来て興味深かったです。

2日目も朝8時30分から、前日同様、再発癌を含めて様々な頭頸部癌に対する治療・マネジメントに関して講義があります。この日はキャンサーボードが2コマあり、こちらも勉強になりました。スライドにのっとり講義される先生方の英語を聞き取るのは、最初はかなり集中力を必要としましたが、キャンサーボードで交わされる議論が活発になるにつれ少しずつナチュラルスピードに近づく英語を聞き取るのも、臨床

英語のトレーニングとして良い経験であったと思います。もちろん、講師の先生方は、大半の受講者が日本人ということで話すスピードには配慮していると仰っておられました。

3日目前半は講義とキャンサーボードがあり、その後実際の治療計画に関する最終講義がありました。GTVとCTVのコントロールについての講義があり、事前予習課題として受講者が提出していたコントロールのデータを用いてターゲットの囲み方をレクチャーして頂きました。頭頸部癌のコントロールの際、解剖学的な区切りの比較的広い範囲をCTVとして囲んでいたのですが、レクチャーではGTVの他、CTV1、CTV2、CTV3として設定されるうち、中間線量を照射するCTV2の囲みはGTVから1cmマージンの所までで良い、という内容であったのが目新しく思いました。実際の治療計画を作る際にターゲットをどのように囲み、何を考えてどの構造をターゲットから外して囲むかなど、豊富な症例の画像を用いて講義して頂いたのが分かりやすかったです。

3日目の最後には、全体を通して講師陣に対して聞

いておきたいことを聞くセッションが用意されており、多くの受講者が、講義についての質問のみならず、日頃の臨床で疑問に思うことについても積極的に発言していました。比較的流暢な英語で質問されておられた方もおり、将来的にはこうした場を含め、英語をツールとして自由に使えるように努力していかなければいけないと改めて思いました。

このように、盛沢山のESTRO Schoolは振り返るとあっという間に終わってしまいました。今回、放射線治療科の後期研修を始めて約1カ月という段階で、全ての講義が英語で行われるESTRO Schoolに参加することになり、講義内容が理解出来るだろうか、新米の自分が行く意味はあるのだろうかと少し心配をしていました。しかし、参加してみると、非常に楽しく、充実した3日間を過ごすことが出来ました。素晴らしい学びの機会を与えて下さいましたコーディネーターの石倉聡先生(名古屋市立大学)、内田伸恵先生(鳥取大学)、講師の先生方やスタッフの方々に心より感謝致します。



= 2018 ESTRO school

ESTRO/JASTRO 共催 2018 ESTRO Schoolを開催して

名古屋市立大学 放射線科 石倉 聡

ESTRO Schoolを開催してからあっという間に時が経ち、この間、大阪では大きな地震に、全国的には記録的な豪雨と酷暑に襲われました。被災された方々には心よりお見舞い申し上げますとともに一日も早い復興を祈念いたしております。

今回、2016年に続いて再度local organiserとしてお手伝いする機会をいただきましたので、経過、感想などをご報告いたします。前回は東京開催でしたので今回は大阪開催となり、2017年2月から会場探しを始めました。株主総会シーズンや他学会と重なり、大阪市内中心部の会場はすでに空きがありませんで

したが、郊外の千里ライフ・サイエンスセンターを何とか確保できました。5月にはウィーンでESTRO教育委員会と打ち合わせを行い、7月には通常の4日間コースから日本版3日間コースにするためのプログラム変更案の検討を始めました。12月にはシンガポールで日本と同じ頭頸部がんのESTRO schoolが開催され、4日間のコースに参加してその充実したプログラムを体感してきました。また講師陣と直接お会いして、特に英語を母国語としない日本で参加者からの質問、ディスカッションをどう引き出すかにも重点を置いて意見交換を行いました。この意見交換を通し

て改めて講師陣の教育に対する熱意に触れ、日本のコースも必ず成功すると確信して帰国しました。その後、JASTROgramの配信、Webページの作成を行い、12月下旬に参加登録を開始しましたが、1週間で申し込みが50名を超え、皆様の関心の高さを感じておりました。最終的にはJASTROから106名、KOSRO経由で3名、ESTRO経由で19名(オーストラリア6、ニュージーランド3、フィリピン4、韓国2、タイ1、カタール1、トルコ1、ルーマニア1)、合計128名の登録をいただくことができました。

さて、1年3か月の準備期間を経て無事に当日を迎えました。教育委員会委員長の内田伸恵先生にはlocal organiserを小生とともに務めていただき、また副委員長の生島仁史先生、担当チームの松尾幸憲先生、萬篤憲先生、辻野佳世子先生、田巻倫明先生、中村聡明先生、野田真永先生には準備・運営に協力いただき、改めて感謝いたします。会場については前回の反省から広い部屋を使用し、コーヒブレイクの改善も図り、この点は満足いただけたのではないかと思います。ただWiFiについては事前の確認にも拘らず、一部接続不良や回線速度の低下などご不便をおかけしてしまいました。一方で電子ファイルによる配布資料の数、サイズともに大きく、100人以上が同時にアクセスするという厳しい環境でもあり、今後の検討

課題であります。

ここで一部ですが、アンケート結果をご報告いたします。JASTROからの参加者のうち86名の方にご協力いただきました。今回も医師がほとんどを占め、放射線科専攻医、放射線科専門医を合わせると24名、放射線治療専門医は60名であり、治療専門医の先生方が7割を占めました。英語および講義内容の理解度はそれぞれ2~9割(中央値7割)、3~9割(中央値7割)で、内容は9割、配布資料と開催期間は8割5分、参加費は8割が適正と評価いただきました。またESTRO schoolには51名が今回初めての参加、21名は前回も参加されており、53名は次回も是非参加したいとの回答でした。次回2020年のテーマは未定ですが、肺がんと婦人科がんの希望が多く、今後ESTROとの調整後に決まる見込みです。

最後に、小生自身はコースの内容のみならず、講師の先生方から教育に対する姿勢、ティーチングスキルを身をもって学ぶことができ、他では得難い貴重な経験をさせていただいたことに心より感謝しております。またご参加の皆様にもとても刺激的で記憶に残るコースになったのではないかと思います。

それではまた、2020 ESTRO Schoolでお会いしましょう!多くの皆様にご参加いただけることを願っております。

